

目的 唐衣裳とは男子の束帯に相当する女子の正装であるが、女性は宮廷の儀式や行事など公の場に出る機会はほとんどなかった為、男子の様は色、形などに關して細かい規定は少なく、公文書としての記録もあまり見られない。善光寺大本願に所蔵されている大正の御即位式用として調整された貞明皇后の唐衣裳一襲（昭和の御即位式にもほとんど同じものが調整されている）を実物調査することができたので、これをきっかけとして着装構成の變遷及び技法について検討してみた。

方法 平安時代、朝廷へ出仕する女官は毎日唐衣裳を着用し、服装によって才能や教養を表現していた事が王朝文学、絵巻物の中に見られる。しかし室町時代、応仁の乱によって皇室の公事が中絶し、現在ある装束もなくなつた為、再興された陸奥の丈が短かく、川腰がなくなり、掛帯を肩にかけて前で結ぶ、縷織の裳を下に重ねるといふ平安朝とは異なる形式のもので、遺品として最古のものは靈鑑寺に所蔵されている東福門院がお返しとなつたものである。その後、復興の流れにしたがって現在の形式となっているが、その過渡期である江戸時代を中心に衣紋道高倉文化研究所に所蔵されている調進目録及び甘法控などの古文書を調査し、現代の宮中における装束と比較してみた。

結果 衣油系の装束は現在の和服と同じ平面構成であるが、二階織物、灰引きなどの地質に合った独特の技法で縫製されており、針目が大きく、特別にしっかりした留めのない事は当時の生活や着用方式に關係があると思われる。又、織や文様などが身分によってはつきり區別されており、着装形態や寸法における相違が当時の資料によって裏づけられた。